



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	多面的価値の共存可能性 : ヨーロッパ文化の源流をたずねて
Author(s)	千葉, 恵; CHIBA, Kei
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 119, 右1-右16
Issue Date	2006-07-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/14491
Type	departmental bulletin paper
File Information	119_r1-r16.pdf



多元的価値の共存可能性

——ヨーロッパ文化の源流をたずねて——

千 葉 恵

1 はじめに

北国の冬の弱い光がゴシック窓の黒い鉄のグリッドを透かして内広がり石壁の白さを浮き彫りにしている。皮なめしの大きな稀観本がソリッドオークの書架に積みあげられ何百年もの歴史を伝えている。ときおり鐘の音の聞こえる中世的な空間に身をおき、多元的価値の共存ということを考えてみる。ほどなく、自分自身、この問いの一例化としてヨーロッパの精神的源流の探求に三十年を捧げてきたことに気づく。今、オックスフォード大学ボードリアンライブラリーの堅固で繊細なライムストーン造りの静謐な時空に身を沈めている。この秋から、学生時代に数年を過ごしたこの街に、久しぶりに、二十年來の恩師との共同研究のために一年滞在している。私の研究はヨーロッパという

魅力的な知的、精神的空間を形成したその二つの源流へレニズムとヘブライズムのあいだに絆を見いだすことに費やされてきた。それは二つの異なる価値世界の共存の可能性を探ることであると云ってよい。しかし、実質的には微視的な世界に埋没しているようにも思われよう。主にアリストテレスとパウロのギリシア語テクスト読みとして過ごしてきたからである。ヨーロッパの基礎を築いた二人の研究は端的に興味深く、倦むことが無い。

八百年も同じテクストが読み継がれてきたこの大学のこの中世的な空間は、同じ使命を抱いてきた先人たちが、この仕事を遂行するにあたり、そして良き実を結ぶためには何が重要であると考えてきたかを、無言のうちに伝えてきている。伝統の保持は、変化ということが常態化したこの時代に、どれほどのレッスンを与え、どれほどひとを作り変えているのか。つくづく文化に応じて大切にすることが異なると思う。その連綿として続く伝統に盲腸のように端に繋がりがながらこの古めかしい書物に囲まれていると、自らの本来的な居場所を見いだしたそのような落ち着いた感覚を持つ。長い歴史のなかで自分の位置が確認されるそのような喜びを持つ。二十年前、『徒然草』第百五十段「能を付かんとするひと」よろしく、「天性骨なけれども」、「上手のうちにまじりそしり笑われるにも恥じず」この伝統の一番下にもぐりこんだことを懐かしく想起する。その春、はじめてこの図書館の Arts End に入ったときの、学問の心臓部に入り込んでしまったそのような息を呑む感覚を今も忘れることはできない。いつのまにか、この空間に居並ぶ貴重な古書も、そして天井の *Dominus Illuminatio Mea*（主はわが光）の羽目板の壮観も日常的となり、今はない故郷の縁側と同じほど居心地よい場所として今日に至っている。その間「ついに、堪能のたしなまざるよりは上手にいたり、徳たけて、並びなき名を得る」に至らなかつたのはなぜだろう。ともあれ、これまで通り「事を重くして」歩んでゆきたい。

哲学と神学というヨーロッパの心臓部に沈潜してきた者として、哲学的な視点から私の小さな経験を交えてこの問いに応答してみたい。個人的には誰をも拘束しないが、普遍的には万人を拘束するようなゴスを求め、それに個人的な印象を重ねて描写してみたい。ゴシック窓から私に見えてくる世界について思うところを記してみたい。一般的には、多元的価値の共存のためには対話による相互理解の必要が説かれるであろう。しかし、それは当然本稿の結論であつてはならない、出発点でさえないかもしれない。それはあまりに正しくこれだけでは内容空疎である。ここでは対話による相互理解が不可欠であること、実質的な力を持つものであることを明らかにする基礎作業に従事したい。私自身、実質的にはこのテーマそのものに向き合う前に、或いは向き合うためにクリアーすべき諸課題に取り組んできたことに気づかされる。自らの研究の一旦を紹介し、諸価値の表現形態と言える諸文化の対話と相互理解の可能性の諸条件を提示したい。

2 プロフェッショナルリズム

価値とはそれ自身望ましい何ものか、追求すべきものであり、或いは他の何か望ましいものを実現する手段として望ましいものごとである。そしてそれが個人において、さらには国家や民族においてそれぞれ異なっている。文化とは民族や国家その他集合体の価値の集積であると言つてよい。それぞれの文化は或る人的集合体にとって、その自然環境、風土、言語、宗教そして歴史が長い歳月をかけて形成してきたものである。その文化に馴染めない或いは異端視される集団や個人は自ら離脱しまた淘汰されるという厳しい現実を刻んできた。しかし、少数であつた者たち、

見捨てられた者たちがしだいに力を増し、既存の文化を乗り越えるということが起こったことも歴史の事実である。私は、新約聖書の『ローマ書』をはじめパウロ書簡の研究を介して、ローマ帝国を三百年かけて素手でつまり迫害の受け手であることのみを通じて征服した、その力の源泉は何であったのかに関心を抱いてきた。そしてヘブライ的なものとヘレニズム的なものの衝突、融合はヨーロッパの長い歴史においてカトリックとプロテスタントの争剋という人間観の衝突を引き起こしたが、その一原因と言えるアリストテレス哲学とパウロの思想のあいだに存在する著しい文化的差異ないし緊張に、和解さらには相補的展開の可能性を探ってきた。しかし、この企ては東洋人という文化的背景を担った者がヨーロッパという実は複層的な文化圏の形成における複層的な諸文化的価値について何らかの解明を企てるという、それ自身何層かに形成されている多元的な価値の垣塙に飛びこむことに他ならない。そのなかで、外側の人間だからこそ、長い伝統としがらみの内部にいる人間には見えないものが見え、そして彼らに緊張をもたらしているものに通訳者として新しい視点を提供しうることを願っている。

諸文化間の対話を実現するために、まず考慮しなければならないことは私にはプロフェツシヨナリズムの問題であると思われる。ヨーロッパ文化という今日のグローバルスタンダードを提供したエンジンには専門分化の著しき、徹底さであると言える。一見狭い領域に閉じこもるように見えても、そのなかの微妙な差異にこだわり、掘んでしまえばはつきりとした差異として提示し、その精密さのもとに多くの科学的発見と科学技術の展開、そして政治経済等社会システムの構築が実現した。その背後には、真理は一つであるという一神教的な世界観があるとされるが、私には、古代ギリシアにおいて展開された、思考を前進させるということはいかなることかをめぐる言論の技術の存在も見逃せないと思われる。絶え間なく生じる諸問題を正面から受け止め議論を重ね、ひとつひとつ解決していく手法として

言論の技術がその基礎を担ってきたのである。世界の範となる科学技術、社会システムそしてその基礎づけとなる思想の展開も、その顕著な果実であると思われる。

当地オックスフォードにおいては、アリストテレス哲学研究者としての私にとつて、日本人であることのメリットはゼロであると言つてよい。現在十人ほどでアリストテレスの『魂論』を読み進めている。魂は物体的なものである、或いは自ら運動するものであると主張する先行哲学者たちの諸見解をアリストテレスは鋭く、説得的に反駁していく。ギリシア語にしてわずか数行を一回二時間かけて、論じ合う。魂というこの不可思議なものを説明すべく、ただひたすら、テキストの正しい読解と吟味を続ける。これは端的に楽しく、いつまでもこの作業を続けていたいと思う。英語という明晰な言語による明晰化の過程は美しい芸術作品と言える。聴覚や視覚の卓越性は音楽や美術を生みだし、言論、思考の訓練を通じて得られる卓越性としての頭脳の明晰性はその果実として第一に書物を生む。

二千年以上前のテキストを解明して何になるのかという実利なことなど問題外である。事柄そのものに即すること、そしてそのなかで何かが明晰に立ち現れることをただ言語を武器にだけ追求してゆく。そこでは、異なる価値の共存は問題にならない。専門的な問題のリアリテイが圧倒し、生涯を言葉によるその探究だけに費やして何ら後悔することがないのである。ラッセルは「生活は私の執事がする」と嘯いた。自己充足的、自己完結的なのである。ニュートンの比喩を借りるならば、自らの堅固な文化的伝統、専門領域のなかで真理探究にいそしむひとは、大海原の波打ち際で美しい貝殻を夢中になつて探している童児に似ている。

解明すべき実質的で重要な問題が存在するということは、問題を明晰に提示していることを含意する。何が問題であるのかが判明しない限り、その応答に出会つていたとしても、それがまさにその問いの応答であることを認識さえ

できないであろう。それ故にこそギリシア以来の伝統である「美しく問いを立てること」が重要なこととなる。思考の前進は問いを美しく仕上げていくこと、つまり答えの見つかりうる問いを提示すること、そしてその答えはさらに次の問いを生むそのような問いを立てることにつながる。思考はそのようにしてだけ確実にしかも少しづつ前進する。思考の前進はあらゆる営みの基礎となる。アリストテレスはこの思考の前進の力である言論をめぐる諸技術を構築した。妥当な推論に関わる論理学、いかなる主題に対してであれプロとコントラの議論を提示する弁証術そして議論の勝利をもたらす弁論術など、ヨーロッパ文化は言論や議論をめぐる彼の訓練を受けることにより、進歩を蓄積してきた。まことに彼らは言葉の民である。そして知性における明晰性と厳密性の追求は人類が存続する限りやまないであろう。そしてそれはコンピューター言語がそうであるように、普遍的なものであり、この訓練は次世代にも、グローバルに継承されるであろう。

哲学という思考の訓練は単に知的な領域に留まらずに、実際にバブリックインパクトを持つことの一例を紹介しよう。哲学の重要性が身近なところで実際的な経済的指標によっても裏付けられたのである。私の先生がカレッジにおける哲学教育を強化すべく、カレッジの卒業生等と呼びかける「オリエール哲学キャンペーン」を実施した。彼の学生たちは世界中に巣立ち、そして経済界、法曹界、教育界などで活躍しているが、彼らの募金がわずかの期間に660,000ポンドに達したのである。¹⁾ 彼ら自身多くはPPE課程（哲学、政治、経済専攻）を修業しているが、学生時代に哲学的訓練がどれほどの応用力を持っているかを実際に社会で経験し、哲学の重要性を認めている結果であると言ってよい。私自身、先生のもとで学び教育の力を真に信じるようになった者のひとりである。

3 ヘレニズムとヘブライズムの絆

知性の明晰性、厳密性のギリシア的な訓練は普遍的なものであり、よきヨーロッパの文化的遺産としてシェアされ続けるであろう。しかし、このことは、この地の専門家の一部の人々に見られるように、自己満足的、自己閉鎖的であることを保障しなければ、そのような態度は歴史的にも裏付けられない。自らの伝統のなかで訓練を受け、専門を究めることに邁進する彼らには、異文化の諸価値を学ぶ違もなければ、意欲もないと言ってよい。自らの文化に自信のないものだけが、このような問いを立てると言わんばかりである。しかし、このような態度は例えば、人間本性の視点から、また長い歴史を考慮に入れるとき、近視眼的であることがわかる。

まず、歴史的にはギリシアの伝統がアラビア世界を介してヨーロッパに伝達されたことを確認したい。アリストテレスの哲学は、まだヨーロッパが深い森に覆われていたころ、アラビア数学に見られるように高度の学問的段階に達していたイスラム世界でその卓越性が認められ、保護され、翻訳および注解がほどこされ十三世紀にパリに到達したのである。これは常に人類の歴史が異なる文化と文明の相互交流のなかで形成されてきたことの一例である。

人間の本性という視点からしても、知性が人間を構成する主導原理であることは、ひとつの人間理解に基づくものでしかないということである。人間には厳密性の及ばないそのような領域を自ら抱えた存在者である。アリストテレス自身が数学と同一の明晰性や厳密性を人間の活動のあらゆる領域に適用してはならないと戒めている。数学の厳密性を倫理の諸問題に適用してはならない。人間全般のことからは数学等厳密科学のロゴスとは異なる次元で構

築されるべきである。知性のひとは普遍妥当するロゴスの力は一切のことがらに及ぶべきであると考え勝ちである。なぜなら、どんな微妙な差異も掴まれたときには明らかかな差異であり、それを妥協したり、ゆるがせにして論じることはできず、偽りのうえにはよい果実を生みださないと考えるからである。しかし、われわれの課題である価値は倫理的な領域に属するものである。価値は究極的には人間の本性理解に基礎づけられるが、これは事柄そのものとして数学や論理学の直接の対象ではない。それらにより人間本性を論じるとき、形式的な次元に留まらざるをえない。われわれはこの課題においてはもう少し踏み込まねばならない。科学技術の発展に見られる知性の成果は善用もされれば悪用もされうるからである。知性そして感性さらには霊性をそなえた人間の総合的理解に向かわねばならない。この段階でどうしてもより包括的な人間理解に向かはねばならないことがわかる。

ギリシア的倫理学そして人間理解はやはり理性中心的な理解に留まる。輝かしい喜ばしい文化的果実ではあるが、歴史のなかでは、人間であることの限定的な解明であった。各古代文明を通じて、人類の精神的成熟が一定の水準に達した「枢軸時代（紀元前八世紀から数百年）」（ヤスパース）を経て、中近東にも著しい人間理解が胎頭した。人類の歴史のなかで比類なきことがイスラエルの地に出来事になったと報告されて久しい。ひとはそれを神の啓示と名づけた。プラトンやアリストテレスには知りえない人間本性の一つの力強い展開がそこから生まれた。ヘブライ的伝統によれば、人間の高ぶりと罪が啓示され、そしてそれはイエス・キリストの出来事において克服されている。人間の根源的なことがらは知性ではなく、創造者にして救済者である信実な神に信実を尽くすことつまり信じることにあるとされる。二世紀の教父テルトリアヌスはこの緊張に切り裂かれ「アテネとエルサレム何の関わりあらんや、理性と信仰何の関わりあらんや」、「不条理なるが故にわれ信ず」と叫んだ。律法ではなく福音が、傲慢ではなく謙遜が、知

性偏重からくる懷疑ではなく福音に基づく喜ばしき探求が、専門分化ではなく人間全体が常に要求され、分析的、記述的言語ではなく、預言者的、詩的言語がもうひとつの源流、ヘブライ的伝統としてヨーロッパのなかに流れ込み、連綿と受け継がれてきた。

実際、ヘレニズムとヘブライズムの伝統の衝突は大きな軋みをこの地にもたらした。愛や自由という基本的な概念でさえ、一義的な理解を得させない。この緊張とその克服の努力なしに、多様性なしに、今日のヨーロッパは存在しない。多様性、差異は豊かさの泉であると言つてよい。ヨーロッパのプロフェッショナルリズムそのものがこれら異文化の衝突、融和から生じてきたと思われる。個人的な体験としても、二十年この地で多くを経験しもう既に旅人とは言えぬ段階となり、幻想から解放されていると自らをみなすが、長い伝統の果実と感じ入る精神の深さに、時に、出会う。この地で出会う、事柄そのものに即したひとつの篤実さ、精神性の源泉は、ひとつには、信仰であれ懷疑であれ人間の根源存在をめぐる超越的なものとの関わりによりもたらされてきたからであると思う。人間を超えるものとの出会いは常に人間を新しいものとして変革する。「新しいものとの出会いは謙遜と勤勉をうみ、古い自我への固執は傲慢と怠惰をもたらす」(パスカル)からである。もし、プロフェッショナルリズムに自閉しているひとつとがいたとすれば、そして彼らが自己満足のうちに、他の真剣な生の営みを考慮しないとき、歴史は繰り返し、「驕れる者久しからず」ということになるでもあろう。この地のよき果実は、異質なものの、異なる文化の絶えざる調和の追及によるものと考えられる。現在でも、その創造的努力は続けられ、政治経済レヴェルでもひとつのヨーロッパをめざしてEU圏として統一通貨が導入され、宗教においてはカトリックとプロテスタントの和解にむけたエキュメニカルな運動が定着している。自らを省みて、われわれが東アジアに共通通貨例えば「グエン」を導入できるかを考えるとき、彼らの想

像力と実行力に頭がさがる。

4 カトリシズムとプロテスタンティズムの和解に向けて

しかし、時には歴史的経緯の外、確立した専門分化した諸学問領域の外から参入した者であるからこそ、彼らの気づかなかったことに気づき、思想通訳者として貢献できるのではないかと思うことがある。かつて宗教改革がドイツの辺境で生じたように、内村鑑三が「恩恵の露富士山頂に降りて、分かれて東西の二流となり……」と「初夢」に記したように、何か極東から新しいことが起こらないとは思えないと思うことがある。長い伝統になずみ、専門分化の著しいこの地においては、哲学者はパウロを読まない、神学者はアリストテレスを読まない。近年私はパウロの書簡を言語哲学の視点から分析してみた。神学者たちが解明に努めてきた「福音」を解釈学的営為以前の地平において言語それ自体が含意する諸特徴を摘出した。解釈はその意味論的分析の成果に限定されるというテキストそれ自身を持つ客観的な特徴の析出を試みた。その一つの成果として、カトリックとプロテスタントの長い争剋において、ヨーロッパの思想家、宗教家たちが何をめぐり思考し、論争してきたかの神学的分水嶺が哲学的にピンポイントできたように思われる⁽²⁾。ここでは簡単にそれを紹介し、多元的価値の共存にむけて一提案を行いたい。極東の一学徒にそのようなことができるか、信じられないが、歴史の審判を待ちたい。

私は「『ロマ書』におけるパウロの意味論」において、パウロが人間存在の三つの実在の層にに応じて三つの対応する言語網を構築していると論じた。パウロは旧約の預言がナザレのイエスにおいて成就した、つまりキリスト(救い主)

という救済の出来事が歴史のなかで生起したことを受けて、人間の理解をめぐる一切をそこから思考した。これは神の愛の啓示であり、神の前の人間の現実として、神により信じる者と理解される者はイエス・キリストにおいて理解されており、彼の「義の衣」を着ることにより、ひとはその衣の下がどんなに醜悪であつても神に義とみなされる。ここでは「イエス・キリストの信（ピステイス）」においてひとの信仰・信実が理解されており、各自が持つ心的状態として信仰のあいだには「差異がない」と言われる。「なぜならすべての者が罪を犯したから」である。マザーテレサとヒトラーのあいだに差異はない。これは神が理解する神の前の福音のもとにある人間存在である。他方、第二の实在の層として律法のもとにある古い人間がある。この福音を受け入れずにこの次元に生きるものは律法のすべてを満たさねばならない。しかし、それが不可能であることは歴史的に論証されている。第三の人間現実とは、われわれ自身の心的状態である。信念としての信仰には第一の实在の層とは異なり「強弱」「成長」がつまり差異がある。これは通常われわれの学問が探求対象とする生身の人間存在である。パウロはこの地平を「汝らの肉の弱さの故に人間的なことを語る」として相対的に自律した人間を讓歩として認めている。

パウロは第一の神の前の人間現実と第三の人間現実のあいだに、帰一的構造による秩序づけを行っている。彼は「汝が汝自身の側で持つ信仰を神の前で持つ」と勧める。信じることは実質的であり、「汝自身に即して」つまり自分なりに持つ信仰のなかで、常にわれわれの神の前の現実を自分のものとせよ、イエス・キリストにおいてある自己を受け止めよと勧められる。信仰は一つの心的状態に他ならないが、その根拠を啓示に、歴史の一つの出来事に持つ。この信仰の帰一的構造は、常にイエス・キリストとの関連において自らを理解することに正しさがあることを告げている。このように、パウロは「信実・信仰（ピステイス）」という語に实在の層に対応させ意味の二相を確立していた。新たな

に啓示された神とひとの信、そしてひとの心的状態としての信である。

実はカトリック神学の完成者トマス・アクィナスと宗教改革者マルティン・ルターはこれら二つの意味におけるそれぞれ異なる一方を「ピステイス」において理解していたのである。トマスはこの啓示の独自性を理解したうえで、アリストテレス哲学の質料形相論のもとに、ギリシア哲学とも共約可能なつまり人間の選択の自由と責任さらに功績（これは聖人の功德による免罪符に至る）を論じることのできる言語網を展開し、心的状態としての信仰の分析に集中した。彼は信仰は恩寵によるが、恩寵や霊への言及なしにアリストテレス倫理学の延長線上で人間の自らの卓越性である徳として信仰を捉え、恩寵と自由の相即性の理論を展開し、恩寵と徳としての信仰は両立すると主張した。信仰が天下りにも祭り上げにもならず、地に足のついたものとなるために、心的状態としての信仰を他文化とも共約可能な言語のなかで理解したのである。トマスはギリシア人（異教徒）を獲得するためにギリシア人になったのである。

他方、ルターは人類にとって決定的なことが起こった以上、そこに集中すべきであると考えた。彼は「聖書が聖書の解釈者である」とし、聖書全体はイエス・キリストを伝えており、哲学を排し、聖書研究を通じ彼に集中した。彼は「ピステイス」において「Fides Christi（キリストの信）」つまりキリストにおいて出来事になった神の信実とひとの信仰・信実を理解し、具体的に信じる者は既にキリストの信実において理解されるべきであると考えた。そこでは「信仰のみ」は「恩寵のみ」を意味し、強弱のある信念としての信仰にならずむことは罪であり、キリストにある自己に固着した。例えば、ルターはパリ学派を次のように批判する。「彼らは注がれた信仰が大罪とともに存在しうるとすら断言する。……神の賜物である信仰が、大罪と共に存在しうるといふことを、誰が教え込まれたりするか……信仰について彼らは何ひとつ正しく解っていない」。ルターは「信仰」において「キリストの信」を理解するので、キリ

ストにある者が罪を犯すはずはありえないと主張する。つまり、ひとの第一の現実と第三の現実を切り離すことは誤りであると指摘する。神の前の自己と生身の自己を架橋するものをパウロは聖霊であると考えている以上、ルターによれば生身の自己にこだわることは聖霊の業を否定することになる。トマスは第三の自己の次元においてだけ、つまり心的状態としてだけ「信仰」を理解するので、その後罪を犯しうると考えている。ルターには「新しい創造」という人類の救いが出来事になった以上、それは中心への集中が欠けると思われたのである。他方、パウロは人間の肉の弱さから相対的に自己を独立したものとみなすことを認めもしており、トマスは福音を他の文化とも共約可能な言語による理解に務めたのである。

意味論的分析を施すことにより、「ピステイス」の二相が解明されたが、二人ともそのいずれかに偏ってしまい、二相のあいだに明確な連関を失っていたのである。その連関をめぐって、ヨーロッパは二つに分かれたのである。換言すれば、聖霊という何ともロゴスにかかりにくい事柄をめぐってヨーロッパは長く論争と戦争を続けてきたのであり、そこにやむを得なさを見るときにも、人間の理性を超えるものに翻弄されたとも言えよう。政治的含意を別にすることが許されるなら、「ピステイス」という同じ言葉をめぐる誤解がこれほどまでの争いを引き起こしたということ、この一事例は、われわれが文化的差異や紛争を克服、或いは回避するために、どれほど対話と相互理解が重要であるかを如実に伝えているように思われる。

5 共存の根源条件…ひととしての等しさ

最後に、多元的価値の共存にむけて、その可能性を保障する同意事項を確認したい。対話が可能となるための一件は共約可能な何ものかの存在である。共通の物指しなしに、何一つ比較検討することはできない。そしてその究極的なしきも最低限の尺度は共に人間であるということ、人間本性は同一であるという信念である。その点で同意がないとすれば、一方が他方を劣った動物であることと見下すことになり、歴史の過酷な現実が示しているように、それは強者による抑圧や争い以外に何も生じさせない。黒人解放指導者キング牧師が演説「夢を持つ」で引用したように、アメリカ合衆国憲法には「ひとはすべて等しい者として造られていることを堅持する」と記されている。その根拠は何であろうか。キリスト教という一つの宗教的信念以上のものではないのであろうか。

ここでは普遍的妥当性を持つことを願いつつ、一つの哲学的論証を提示したい。ひとは誰であれ死すべき存在者である。そのことはこの限られた生そのものがどこから来てどこへ行くのかという問いにさらされ、応答することを迫られていることを示す。そして単に問われている存在者というだけでなく、実際、自らは何であるかという、その自らの存在に対して何らかの了解を持ち、態度を取っている存在者である。究極的には、人生のささやかな営みも死というものに関連づけられるものであり、実際意識に上らずにも関連づけずにはいられない存在者である。その証拠に、或る行為に対して、「何故にか」の問いの連鎖は死をめぐる人間本性理解の提示において終局するからである。換言すれば、死は生まれた時には死ぬのに十分なほど年を取っている人間各自にとって究極的な事柄であり、その態

度は、無神論や有神論そして不可知論という仕方では表現されてきた。一方、死は無であり、蛆虫のえきになるだけであるという強い信念に生きる。無神論は一つの信念である。他方、有神論者は恵み深い或いは峻厳な神の前に立つことだと考え、常に自ら持つ信仰を神の前で持ち、キリストの憐れみに固着する。有神論も一つの信念である。不可知論は前者のいずれとも決めえないとし判断を保留する。一見、この立場は最も理性的に見える。しかし、この立場でもひとは具体的な生において選択を迫られており、有神論者のように神の前に立つという信念のもとに生を構築できない以上、実質的には無神論者に吸収されている。不可知論も一つの信念に他ならない。このことは人間は誰であれ知ることではできないが、信じるしかたがらを抱えていること、さらには信じるしかたがらはそれと共に或いはそれによつて生きることができると示している。

ここに信仰が必然的問題となる宗教が介入する。宗教を持たない民族がないことはそのことを如実に物語っている。かつて現イランのシャミダールの丘の洞窟において五万年前のネアンデルタール人の遺骨とともにそれを囲む花粉の痕跡が検出された。そのころ人類は既に死の観念をもつていたのである。祭られた花々は現在でもシャミダールの丘にそよいでいると言う。信じるしかないものを抱えている人間は自らの「存在」を知りえず、ただ或る了解のもとに態度を取っているだけの者である。哲学的伝統においてはこの存在は「実存」と呼ばれてきた。誰もが自らの存在に対して態度を取っているとは、誰もが実存に生きていることを示す。そして人類にとつて最も大切な事柄は自らの存在の了解を得ることであるとするとするならば、誰もが実存に生きる時、人類にとつて最も重要な事柄にそれぞれの方で関わっていることを示している。つまり、この点で人類はすべて等しいものとしてある。当然、その関わりの方は千差万別である。しかし、個々人はその関わりを通じて、人間本性に対する正しい信念を持つに至る可能性のうちに

生きている。この可能性のうちにある限り、ひとはそれぞれの根源的価値について同意に至る可能性を持っている。この実存上の保障のもとに、ひとは他者との、多元的価値の共存を求めて生きている。

ひとは誰もが人類にとって最も重要な事柄にそれぞれの仕方に関わっているということを正面から受け止めること、それが諸価値の共存の出発点であると思われる。この共通の地盤に立つことによつてのみ、それぞれが重要とみなす事柄に誠意と共感をもって相互の同意することがらと相違することがらに對話を重ねることができるようになるであろう。この共通の了解なしに、一方が自らの人間理解、世界理解を喧伝するとき、それは強制ではあつても、説得とはならないであろう。そこに愛がないからである。なぜなら、支配からも被支配からも自由な唯一の場所に来た事になるもの、それが愛だからである。

(二〇〇五年十二月)

注

- (1) Cf. Oriel News Issue 1 Summer 2002 p.2 (Oriel Development Trust)
- (2) 拙稿『『ロマ書』におけるパウロの意味論——ピステイスの二相——』大貫、月本編『日本の聖書学』第八号 pp.87-140 (ATD/NTD 刊行会 2003)、拙稿「トマスとルターにおける信仰と愛——恩寵と徳の両立可能性——」中世哲学会編『中世思想研究』XLVII pp.53-72 (知泉書館 2005)